

シューマン:花の曲

ウィーン滞在中の 1839 年の作。タイトルはドイツの作家ジャン・パウルの小説『ジーベンケース』から採られたとされる。5 つの楽想からなる 7 分ほどの小品で、シューマンのビーダーマイヤー的な感傷が表現されている。

T.アデス:Az ág (枝)

トーマス・アデスは英国の作曲家で、ピアニストとしても活動している。本曲のタイトルは 20 世紀ハンガリーの詩人シャンドール・ヴルシュの同名詩集から採られている。2022 年にアイスランドのピアニスト、ヴィキングル・オラフソンのアルバムのために書き下ろされた 1 分半に満たないピアノ独奏曲。

シューマン:謝肉祭

1835 年に完成したシューマン初期の傑作。全 20 曲からなり、副題にある「4 つの音符」とは、シューマンの元恋人エルネスティーネ・フォン・フリッケンの出身地アッシュのドイツ語表記「ASCH」を音名で表記したもの。「As-C-H (ラ♭-ド-シ)」あるいは「A-Es-C-H (ラ-ミ♭-ド-シ)」のいずれかの音列が(第 1 曲「前口上」と第 12 曲「ショパン」を除く)各曲に用いられている。

G.クルターグ:花、私たちは...

《遊び》は、1973 年から現在に至るまで書き継がれているピアノのための小品集。第 1 巻所収の本曲は 2 分弱の短い曲だが、夢の中にいるような不思議な感覚にとらわれる。

T.アデス:皆殺しの天使より - 子守歌

スペインの監督ルイス・ブニュエルの映画『皆殺しの天使』を、2016 年にトーマス・アデスは 3 幕もののオペラに仕立てた。その第 3 幕第 3 場の「子守歌」を 2018 年、ゲルシュタインのためにピアノ独奏用に編曲したもの。

ラフマニノフ:リラの花

原曲は 1902 年に完成した《12 の歌曲》作品 21 の第 5 曲で、1913 年にピアノ独奏用に編曲された。すがすがしい朝に甘い香りを放つリラの花を眼前に見るような美しい曲で、アンコール・ピースとしても人気が高い。

チャイコフスキー:花のワルツ

1892 年に初演されたチャイコフスキー最後のバレエ音楽《くるみ割り人形》は、作曲家の筆が冴え渡った傑作。楽想の豊かさ、華やかさが宙を舞う「花のワルツ」は、効果的なオーケストレーションと相まって「メロディメーカー」、チャイコフスキーの面目躍如たる一曲。

F.コーイ:文明に向かう 2 つのワルツ

フランシスコ・コーイは、トーマス・アデスに作曲を師事したこともある現代スペインの俊英。この「2 つのワルツ」は 2024 年、ゲルシュタインのために作曲され、初演も彼が行なった。インスピレーションのもととなった『ニューヨークの詩人』(1930)は、グラナダの詩人ガルシア・ロルカが実際に滞在したニューヨークの印象を描いたもの。

ラヴェル:ラ・ヴァルス

「ヴァルス」とは、フランス語で「ワルツ」の意。完成は 1920 年で、19 世紀ウィーンの古き良きワルツへの憧憬を旨とし、ラヴェルならではの精緻な音の奔流のなか、ワルツの断片が浮かんでは沈み、高揚を繰り返したのち、最後はカタストロフが訪れる。